

広大紛争座談会に参加して

(大学紛争の思い出・感想)

平成一九年九月

鳥居 秀次

平成一八年七月初旬に広島ガーデンパレスで行われた広島大学学生部OB会に出席したとき、今井先生(大学紛争当時の学生部長)から「大学紛争についての座談会」を開いて紛争当時の記憶がある間に記録に残したいという企画があるのだが、「座談会のメンバーとして誰か適当な人はいませんか。」という話があつて、そのときは「そうですね、誰が良いですかね。」というところで、そのまま記憶からは遠のいていた。その後、確か九月の中頃、広島大学文書館の小池館長から「大学紛争を語る座談会」のメンバーのひとりとして今井先生から推薦していただいているので是非参加して欲しいと依頼があつた。私は大学紛争当時には事務局庶務部庶務課に所属していたこともあつて、大学紛争(学生紛争)には直接係っていないので余りお役にたたないと思いつつも、折角今井先生のご依頼ということで参加させて頂くことになった。座談会が進むにつれて大学紛争の核心に触れるようになってくると、私よりもっと適当な人がおられるのではないかと思つたが、高齢であるとか体調を崩されておられることなどもあり、私が参加をづけることにした。

しかしながら、私は常日頃、日記等に記録を残すとかメモなどをする習慣もなく、大事な仕事のことなどでも記憶だけに頼る生活をして

いたので、もちろん大学紛争のことも記録をとっていないうえに、年齢とともにその記憶が相当に薄れてきた。また、紛争当時から約四〇年も経過している現在、いろんな出来事の前関係の記憶がぼやけていて、他のメンバーの方にご迷惑をかけたのではないかと思う。

私は大学紛争当時、先に書いたように昭和四二年一月からは庶務部庶務課に所属していて、学生と接触することは殆んどなく、紛争が何を目的(目標)としてどういう形で進んでいるのか殆んど知らなかった。その後、昭和四四年五月、飯島先生が学長に就任されると同時に私は学長秘書を命じられて、その役職から紛争の情報を収集するため、学生部次長をはじめ学生課の職員から紛争の情報を得ていて、多少は分かっていたと思つていたが、今回の座談会で先生方のお話を聞いて私は大学紛争の実情は何も知らなかったのではないかと思つた。

座談会の資料から大学紛争の経過を見ると、安保反対闘争、ベトナム反戦闘争、羽田闘争、原子力空母佐世保寄港反対闘争などを経て、大学当局に対する八項目要求を標榜するところから全学的紛争の様相を呈してきた。しかしながら全共闘中核派としては八項目要求など本心ではどうでもよくて、一般学生を動員する手段に過ぎず単に大学闘争の戦術として取り上げたとは思えないものであり、大学をバリケード封鎖し大学の構成員である一般学生や教職員を大学キャンパスから学外へ追い出してしまった。その結果は、当然のことながら授業はおこなわれず、一般学生は紛争から離れていくことになって全共闘の思惑とは異なつた方向に進んでいき、挙句の果てに彼らの戦術はますます激化していき、中核派学生の傍若無人な振る舞いは目に余るも

のようになっていった。

全国的にみて中核派が目指す大学紛争は、単なる学生運動、大学改革運動の域をはるかに超え、あらゆる体制の否定、教育・研究の否定、破壊といった政治思想的な主義主張の貫徹を目指し、そのためには手段を選ばない暴力的破壊行動に発展し、大学闘争を政治的に利用し革命への道に向かって進んでいった。全共闘中核派は、組織拡大のためか政治的イデオロギーに少しでも相容れないものであれば暴力で以て否定した。目的のためにはいかなる手段も、法や道徳に違反することも正当化されると考え、革命という表現をすればマスコミも法律をこえた暴力に許されるような雰囲気思えた。

今回の座談会は、文書館の小池館長が司会進行をつとめられ、大学紛争の流れを上手く纏められていて、私にとつては紛争を理解するうえでおいに助かった。しかし、話題の大半が全共闘中核派対大学当局のやりとりで終始した。しかしながら、その他ほとんどの学部においても、学部教授会とそれぞれの学部自治会代表（学部によっては学友会）等との交渉も相当に紛糾し、その結果、多くの学部のバリケード封鎖が行われたのであった。このことについてもう少しは触れることができればよかったのではないか、という気がするけれども座談会のメンバーに当時の各学部教官が居られないので止むを得なかったのではないかと思う。

おわりに大学紛争がもたらした功罪について私の考えを述べてみたい。

紛争さなかに学長に選出された飯島先生は、学長に就任以来局面打

開のために出来る限りの機会をとらえて、学生、全部局の教官との対話につとめられて、紛争を終結に導くと同時に、大学としての新しい体制の確立につとめるために大学改革に取り組まれた。広島大学躍進の基礎づくりが出来たのは、大学紛争がもたらした功罪のなかの最大の功績であろう。学長のリーダーシップのもと、紛争解決と大学改革のために各学部から選出された多数の各種委員会のメンバーが紛争解決のために努力され紛争は鎮静化に向かった。さらに大学改革に向かって全教職員が学部の壁を超え一致団結協力して改革案を作成した。それが基になって現在の広島大学を創りあげたのではないかと思う。

問題点としては、紛争期に在学した学生の教育がまともに出来たであろうか、一部の学生のために迷惑をこうむった一般学生は大変に気の毒であったと思う。

教官は本来の任務である教育・研究を犠牲にして紛争解決に当たられ、研究面では相当の遅れがあったと思われるが、改革による研究条件の向上、新キャンパスへの移転、施設設備の充実などにより研究の遅れを取り戻せたのだろうか。

事務官も紛争解決のため、本来の任務（事務）はあまり出来なかつたが、大学のあるべき姿を取り戻すために、ときには体をはって一般学生のために頑張った、特に学生部系の職員は苦勞が多かつたのではないかと思う。

以上思いつくままに書きました。